

特集「人権思想と現代」

Feature: Ideas on Human Rights and the Present Age



ARTICLE PREMIER
SONT LES DROITS, LES DISTINCTIONS, SO-
VENT ETRE FONDES QUE SUR
MUNE.
II
TOUTE ASSOCIATION POLITIQUE
NATION DES DROITS NATURELS
DROITS DE L'HOMME, CES DROITS
ET LA PROPRIÉTÉ, LA SÉCRÉ-
TÉ, LA L'OPPRESSION.
III
TOUTE SOUVERAINETÉ RES-
TANT DANS LA NATION, NUL
INDIVIDU NE PEUT ENRAGER D'AU-
TRUI EN MANE L'EXPRESSÉMENT.
IV
NUL N'EST A VOIR L'ARRÊT, POU-
R PAS A VOIR, ANSI L'EX-
NATURELS DE CHAQUE HOMME
QUE ELLES QUI ASSURENT AUX
DE LA SOCIÉTÉ, LA FOURNAN-
ES DROITS, CES BORNES NE PEU-
T ÊTRE DÉPASSÉES QUE PAR LA LOI.
V
DROIT DE DÉFENDRE QUE LES
DROITS A LA SOCIÉTÉ, TOUT CE
DÉFENDU PAR LA LOI, NE PEUT
ÊTRE VIOLÉ, NI ÊTRE CON-
TRAINT, NI ÊTRE ORDONNÉ PAS.
VI
L'EXPRESSION DE LA VOLONTÉ DE
LES CITOYENS ONT DROIT DE
S'ASSEMBLER, DE SE RÉUNIR, DE
S'ASSEMBLER, DE SE RÉUNIR, DE
POUR DÉTERMINER, POUR
ELLE, PENSER, POUR ELLE, PRO-
POSER, A SES VUE, POUR ELLE,
SÉRIÉS A VOIR DROITS,
LOIS PUBLIQUES, SUIVANT ELLES,
A VOIR DISTINCTIONS, QUE
LES VERTUS ET DE L'ÉTAT, SONT
VII
NUL N'EST A VOIR, ACCUSE, ARRÊTÉ, NI
NUL N'EST A VOIR, DÉTERMINÉ, PAR LA
LOI, FORMES DE ELLE A VOIR, RE-
SOLUTÉ, EN POUVOIR, L'EX-
PÉRIENCE DES DROITS, ARRÊ-
TÉ, POUVOIR, MAIS POUR ELLE,
OU SAISIR EN VERTU DE LA LOI,
L'INSTANT, IL SE REND COUPA-
BLE, SANS ÉCART.
VIII
ÉTABLIR QUE, DES PEINES, STRICTE-
MENT NÉCESSAIRES, ET NUL
PUNI, QU'EN VERTU D'UNE LOI,
MULTIPLIÉE, ANTIÉQUITÉ,
ÉGALÉMENT APPLIQUÉE.

対談

近代化とナショナリズム

桑原武夫十樋口謹一



明治期日本の国権と民権

桑原 きょうは、「近代化とナショナリズム」というこ

とで二人で話し合いをするんですが、樋口さんと僕とはもう古くから、正確に言えば一九五〇年ぐらいから一緒に仕事をしてきた。もちろんそれぞれ考えはちがうとこ

ろもあるのですけれども、基本の土俵のことはお互い知ってますから、話は通ずると思うんです。それで「近代化」とは何かというふうな、アカデミックな定義やらをやっているのは時間が惜しい。

私は、古いことですが、一九五七年に書いたエッセイ「伝統と近代化」、岩波講座「現代思想」第十一巻）のなかで次の六つを近代化の条件として挙げています。(一)政治における民主主義、(二)経済における資本主義、(三)産業における工業生産、(四)教育における国民義務教育制、(五)軍備における国民軍の成立、(六)意識における共同体からの解放(個人主義、伝統排除)。このうちのどれに力点をかけるかによって近代化の考え方が変わっていくわけだけれども、今日は時間があまりないから、いま挙げた六つの条件に共通するというか、これをひっくるめるといって、ごく普通の新聞や雑誌に書いてある意味での近代化という意味で話し合っ、問題によってそれを制限とか追加をすることにする。「ナショナリズム」もこれまたいろいろな定義、いろいろなとらえ方があるでしょうけれども、これも普通の意味でとらえる。

それで近代化ということについてですが、僕の観察のまちがいかわからんけれども、近代化が起こってありがた迷惑だという考えが日本にはあると思いますね。ヨーロッパにも科学否定思想とか、そういうのはもちろんあります。けれども、近代化は迷惑だったというのはあるのかどうか、樋口さんどうですか。ヨーロッパにありますか。

樋口 ないことはないでしょう。けれど、それが近代化への刺激になったのではないですか。

桑原 しかし日本では、一種の文化的というか、政治から離れて文化的に一種の古典的な保守主義みたいなものがずっとありますよね。それはたとえば、私の思想を押しつけるわけではありませんけれども、『万葉集』は八世紀ですが、そんな時分の今から千年も前の文学の形態である和歌、今は短歌というのでしょうか、三十一文字をそのままでも、もちろん新派もありますけれども、古典的な昔の文学形態のものが残っているというのはあまりよそにはないですからね。それをあたりまえと思っているけれど、そういうムードがありますから、それと結

びつて近代化でいろんな昔からのいいものが減じる、必然的に消えていかざるをえないというふうなことを、呪うとまではいわなくても迷惑だという考えが、日本にはあると思います。

樋口 たしかに先生の言われるとおりだと考えますけれども、近代化一辺倒にならずに抵抗する、そういった個性とでも呼べるものがあつたことが、近代化を促進するのに力があつたのではないのでしょうか。

桑原 そう言えるかどうかはまあ、さしおいて、近代化は迷惑だという部分があつたことをまず確認しておきたい。これとナショナリズムというものが微妙な関わりがあると思うのだけれども、日本の場合、ナショナリズムという言葉の訳がいろいろあるわけです。「国家主義」という意味に訳される場合があつて、ことに日本の明治以後の、簡単に言えば富国強兵のものの支え、また富国強兵的思想に支えられたものとしてのナショナリズムというのがあります。これは近代化とつながるところがあると思うのですけれど、この二つの関連がどうだったか、よくなかつたというのか、今はよくないというのか、そこら辺どこが問題なのか。樋口さんなどはどういうふうに受けとめますか、つまり問題として……。

樋口 現代まで、スツときてしまうのですけどね。

桑原 現代もそれがあると……。

樋口 国家主義以外に、「国家主義」という訳し方もあるでしょう。それからもう一つ「民族主義」というものもあるでしょう。

桑原 国家主義というのはぬかしてもいいけど、民族主義と国家主義というのは……。

樋口 民族主義というふうになると、場合によつたらナチスとか、あのあたりを連想するでしょう。ところが国家主義というふうに訳されなかつたのが、やはり日本で一番の問題点で、西洋だったら英語でいうネーションでしょう。ネーションだったら、ステートよりはプラスイメージでしょう。そのあたりの差が、どうも「国家主義」という言葉が日本になかつたのが……。

桑原 なかつたというのか、「国民」という言葉はあつたんですけれど。

樋口 たとえば徳富蘇峰の「国民の日本」とかあるんだ

けれども……。

桑原 「国家主義」という言葉はほとんど通用しなかつた。国家主義、民族主義、これは両方とも注釈をつけなくともわかりますがね。ナショナリズムというのは、このごろはたいてい片仮名で書きますけど、しかし国家主義ということを書かれたときがありますか。もちろん明治になつてからの話ですが。

樋口 「主義」をつけたのはないですね。だから、これが問題というか……。

桑原 そのことはやはり、これも不満の人がいろいろあると思うけれども、日本の近代化というのは国家が中心だつた。いまちよつと、良いとか悪いとかはのけて現象として考えると、もちろん国民もがんばつたんだ、それを否定するわけではけつしてありませんけれども、目立つこととしては国家というものが中心になつてやつた。

樋口 歴史的な国家的な事業としてですね。それはつまり明治維新の、十九世紀中ごろの国際状況からきていると思いますね。

桑原 ですからその方向で考えると、明治の富国強兵で

すけれども、あれは富国を実現することによつて強兵でありたいと、強兵に力点がかがつていたと思いますね。

富国にしたい、豊かな生活をしたい、しかしそれを邪魔するやつがおるから、それを防がんならんと、防衛的な意味で強兵と言っていたのではないと思います。もちろん防衛の意味もありますけどね。

樋口 だから明治の状況というふうなことで考え直すと、国権派と民権派があつた。先生がおっしゃるように国家のほうに主導があつたのに対して、自由民権派がいろいろ抵抗したけれども、やはり主導権はずっと国家にあつたのは確かですね。

そこでちよつと問題にしたいのは、自由民権派の思想的なリーダーの一人である中江兆民の『三酔人経綸問答』における「恩賜の民権」と「回復の民権」、これをどう、もう一遍評価し直すか。

河野健二先生編の『近代革命とアジア』（名古屋大学出版会）という本をここにもつてきているのですが、これは一昨年の七月に中部大学国際関係学部がもよおしたシンポジウム「アジアの近代化と社会変動」を機縁にして

作られた本です。シンポジウムには「フランス革命二〇

〇年記念シンポジウム」という副題がついている。桑原先生もシンポジウムで「近代化と近代革命」について特別講演をされていて、この本に収められている。その内容は、今日のお話のなかに出てくると思うのですが、本にのっているほかの論文にもなかなか面白いのがある。問題提起として示唆に富むのがあって、あとでふれたいと考えているんですけども、河野先生は本の「序」の中で、問題を現代の視点、つまりポスト・コロニアル・エイジという視点から取り上げられている。

同じように言うならば、明治維新なりフランス革命というものを、現代においてどういう視点から取り上げたか。その場合に私は、さっき言った兆民の恩賜の民権と回復の民権というのが、たしかに第三世界へのモデルというんじゃないですけど、問題を切っていく一つの切り口にはなるような気がするのです。『三酔人経綸問答』は桑原先生が島田慶次先生と一緒に現代語訳（岩波文庫）をされているので、私がいまだ口を出すことじゃなくて、先生から言っていたきたいのですが

ことができる。恩賜の民権は、上から恵み与えられるものだから、その分量の多少は、こちらが勝手に決めることはできません。恩賜の民権をもらって、すぐさまそれを回復の民権に変えようなどと思うのは、論理の飛躍ではありませんまいか。

では、兆民はどうすべきだと言っているかと言うと、少しあとでこう書いている。「たとえ恩賜の民権の分量がどんなに少なくとも、その実質は回復の民権とちつとも違わないのですから、われわれ人民たるものは、これをちゃんと守り、大切にいつかつて、道徳という霊気、学問という滋養液で養ってやるならば、時勢がますます進歩し、歴史がますます展開してゆくにしたがつて、次第に肥えふとり、背が高くなって、かの回復の民権と肩を並べるようになる、それはまさに進化の理法です。」

この兆民の文章を取りあげたいと思うのは、中国での最近の事件です。去年、胡耀邦が中国で失脚した。その原因の少なくとも一つの中に中国の学生運動があつて、その中の中心であつた科学技術大学の大学院学生の『大字報』に「恩賜の民主」という言葉があつた。実は最近

ね。

まあ、先生にも思い出していたくためにも、問題の箇所を読んでみたいと思います。その前に、この本が兆民の言葉でいうと「おくれて文明の道にのほり、今や改革の気運に直面した国家」という問題状況をふまえて書かれていることに注意しておきたいんです。まさに「近代化」の問題状況にほかならない。さっき先生が指摘された近代化反対の代弁者が「豪傑君」、近代化推進論者が「洋学紳士」、そしてこの二人の中に立つて現実論を主張する「南海先生」という三酔人が論じ合っているのですが、兆民自身が「このあたり、いささか自慢の文章です」という頭注をつけている南海先生の論を読んでみます。

「ふつう民権とよばれているものにも、二種類あります。イギリスやフランスの民権は、回復の民権です。下からすすんで取ったものです。ところがまた、別に恩賜の民権とでも言うべきものがあります。上から恵み与えられるものです。回復の民権は、下からすすんで取るのであるから、その分量の多少は、こちらが勝手に決める

になつて『中央公論』に『大字報』なんかの詳しいデータが出ましたので読んだのですが、その「恩賜」というのがいったい中国語での原語は何かということ、私の研究所の同僚の狭間直樹君に調べてもらったら、「恩賜」の原語は同じであつて、しかも諸橋轍次の『大漢和辞典』によると用例は『後漢書』にあるということなんです。

最近ではどういう使われ方をしているかということについては、ちょっとわからない。だから、まさか兆民の影響ということについてはあまり考えられませんが……。

桑原 私のところへ見えた中国の女性の学者ですけども、私といつしよに『三酔人経綸問答』の現代語訳や訳注などをやった島田慶次さんのある意味でお弟子さんにあたる人で、中国の哲学研究所で思想史をやっている人です。その人が見えて、いま『三酔人経綸問答』の中国語訳がもうできている。中国は日本とちがつてなかなか出版が難しい。そう簡単に右から左に原稿がきたら刷れるということでない。しかしその順番も来て、正確に何月とは言えないが、おそらく今年中には出る。

そういうことで、ほかにも用事があって見えていろいろ話をしたんですけども、私に中国語訳の簡単な序文を書いてほしいといわれて、どう書いていいかわからんけど、まあお引き受けしているのです。中国でこの訳が出るということ、そして島田さんと私が注をつけた岩波文庫のテキストによってやられるわけですから、私どもとしては大変喜んでるわけです。そしてここからは推測ですけども、いまある意味で、百家争鳴とは言えませんが、いろいろ思想上の近代化を推進しているなかでそれが出るということは、非常におもしろいと思います。

それからついでに言えば、『三酔人経綸問答』の英語訳が出てましてね。これのアメリカそのほかでの批評がどうなのか、私は十分にフォローしていませんけれども、まあ好評のようです。そういうところまで注目されるようになったということは大変面白いと思うのです。

ポスト・コロニアル・エイジの国家と人権

樋口 その点は河野先生の言った現代、ポスト・コロニアル・エイジの視点から言いますと、さっき言った中国

の学生運動の『大字報』では結局、恩賜の民主というのは上からもらったものだから、いつまた取り上げられるかわからん。だから自分たちが下から戦い取らんといけないということを書いてあるわけです。

桑原 それはだれが書いたのですか。

樋口 科学技術大学の大学院学生が書いている。

桑原 個人ですか、それは……。

樋口 そこまではわかりませんが、『大字報』ですからね。桑原 大学の学生委員会が一応、承認を出しているわけでしょうね。個人の逸脱した考えではないと思いますね。

樋口 だから先ほどの兆民の言葉でいいますと、恩賜の民権はだめで、回復の民権、進取の民権でないとだめだというのが、この中国の学生たちの立場でしょう。ところが、そこまで言うのは問題ですけども、現在の中国の政府のほうは、兆民と同じ立場らしい。つまり恩賜の民権と回復の民権とは量の差であって質の差じゃないから、そんなに急進的に急がなくて、もっと漸進的に養い育てていけばいいじゃないかというふうな立場じゃない

か、という解釈は成り立つかどうか。

桑原 それがあなたの……。

樋口 ええ。僕の解釈は、そうかもしれないと思いますがね。それはしかし、中国だけじゃなくて第三世界なり、あるいはことに東南アジア、さらに縮めると韓国とかフィリピンとか、場合によったらインドネシアとか、いろんなところで同じような問題状況があるんじゃないかという気がしますね。さっきふれた「アジアの近代化と社会変動」のシンポジウムの討論でも、名古屋市立大学の芝原拓目さんが面白い問題提起をしている。現代のNICSでの「開発独裁」「権威主義的体制」とこれに対する「民主化要求」との関連で明治維新がモデルになるという意見があるのだそうです。芝原さんは必ずしも賛成ではないらしいけれども、もっと問題にしてもいいと思います。

桑原 それは革命の進行の過程にもよりますけれど、フランス革命の場合だったらバスターイーユをもちだすまでもなく、人民というか民衆が立ち上がって普通の意味の騒動があったわけですよ。実力行使みたいなのがあった。

そのほうが革命としては格好いいですね。そしてわかりやすいし、絵にもなるし、ロシア革命でもそうですけれどね。

しかし、その革命が成功して、そして民権——この民権の解釈をやりだしたらきりがなければ、人民が力を持つ。人民がすぐ大統領になるわけではないでしょうけれども、権力が人民に支えられている。革命でパッとそういうふうに変わったら、それは何らかの形で、まあ兆民の言葉で言ったら民権の回復でしょう。回復されるものは昔あったはずなんです。

樋口 そうそう。それを取り戻せる。

桑原 僕はそこははっきり覚えていませんけど大昔はそうであった。自然状態みたいな……。

樋口 自然権、つまり基本的人権として本来もっていたものだと。

桑原 それを権力に奪われていた、それを回復した。それが回復である。

だけどそうでなくして、たとえばレーニンならレーニンが勝って、君たちは明日から、このソ同盟の人民であ

つて、諸君の意見が私、レーニン政府に反映するんだ、あるいは反映だけでなくして、要求をわれわれが実現していくんだ、そういう形になりますと、それはよそから冷やかに見ていると、やはりもらったと……。

樋口 それも恩賜だと思いますよ。

桑原 「恩」という言葉は、なにか「皇帝」というふうな感じがありますから。

樋口 さっき桑原先生のふれられた英訳本では、「恩賜の民権」は「ライツ・アズ・アン・インペリアル・ギフト」と訳されている。「皇帝のたまものとしての諸権利」というわけです。

桑原 僕はどうもこういう問題などを考えると、歴史が無視できない重要なことなのはもちろんだし、問題は歴史をふまえて出てきたものだけれども、現実を起こっている状態あるいは事件というのは、現実の今の歴史の中にあるわけですから、そこでどういう働きをしているか、あるいはどういう状況にあるかということが大事なわけで……。

だから、明治維新がブルジョワ革命であるかどうか、

あるいはブルジョワ革命としてもこういう性質だとか、それを精密に分析してももちろんいいし、僕は明治維新は革命だと思っけれども、そういうしたことよりも、その革命の効果がよかったか、よくなかったかとか、そういうことのほうが大事だと思うんですよ。

そうしますと、たとえば中国で、いま学生諸君が要求しているといわれる民権とか民主的な状態が恩賜であろうとね、現状がよければいいんじゃないか。シェークスピアの「終わりよければすべてよし」というふうなことが歴史の中の人間の行動——人間というのは単数ではないんですけれども——にはあると思う。

先ほどあなたが使われたポスト・コロニアル・エイジでしたか、植民地時代というものがあつた。これは残念なことだけれど、あつたことはあつた。ないほうがよかったかもわからんけれども否定できない。その植民地時代がよくも悪しくも第二次大戦後でほとんど消えるわけですから、それからの問題を考えるときには、もちろんイギリスがどうしてうまくインドを手中におさめたかというこの研究も必要だけれども、インドが解放され

ばそれでいいわけですからね。

兆民がどう考えたかということは、これは人によってちがうし軽々に言えませんが、僕の考えでは、兆民は、若いときは知らず、あれを書いた時分は、恩賜の民権でも民権は悪いものではない、いいものであれば、原因は、あるいは獲得したプロセスは——獲得というベキか受領というベキか、それはちがいますけれども、状態は同じだからそれを磨いていきましようと考えていた。これは悪くいうとだら幹的発想でないかといわれるおそれがあると思いますけれども、僕はそれは認めたほうがいい、と思うのです。ごく通俗的なシンプルな発想だけれども。

樋口 僕も大体、そうなんです。先ほどのナショナリズムでいいますと国家と国民、これは権力と人民というふうに訳してもいいですけども、そしてそれを上から下下からかと言ってもいいですけど、実は「上から」「下から」という分け方も、現実には政治というのは両面があるわけでしょう。それをどちらかに極限化して理念型をつくってしまったら恩賜の民権になり、回復の民権に

なるけれども、現実の政治にはいつも両面があると思うのです。

ところがさっきのシンボジウムの討論でも遅塚忠躬さんは、フランス革命は下からで革命だ、明治維新は上からで改革だ、この二つは質的にちがうから転換不可能だというふうに言っている。けれども、これはやはり現実政治としたら転換可能ということで、兆民みたいに上からの恩賜の民権を下からの回復の民権に転換が可能であるというふうに考えたほうが、僕は現実的ではないかというふうには思っています。

桑原 それはあなたのおっしゃるとおりだと思うのですが、ものの獲得とか授与ということは、与えるものがあるって受けるものがある。それを穏やかに渡す場合と、奪い取る場合とがある。しかしある物体が一人の手から他人の手へ移ったという、そういう基本的な形は残るわけで、受け取るものがなければ与えるものもありえない。ですから、それは説明するときに、あるいは一つの単純化して言うときに「上から」「下から」ということは、言ってもよいと思います。しかし、あまり上から、下か

らということばかり言うのは現実的でないと思います。
樋口 だから「上から」「下から」も、ウェーバー的に言うならば理念型、現実には存在しない一つの基準であって、それを基準にして現実をどう見るかというので、現実には両方ともあるんだと思うのですけれどね。

桑原 だから今、植民地時代が過ぎて、大げさに言えばこれから世界のいろんな国はいかにあるべきか。イギリスとか日本とか、ここまできている国もあるし、これから近代化をやらなきゃならん国もあるわけですから、それをいかにやるべきかというところの考察をするほうが大事だと……。

兆民の言ったように、「おくれて文明の道にのぼり、今や改革の気運に直面した国家」なわけで、そうした国が先進国に追いつこうと思う、社会改革ですからね。社会革命であるか社会改革であるか、それも、またどちらでもいいと思いますけれども、その場合には個人はもちろんががんばらなきゃならんと思うけれど、やはり集団としてでなければできないということが明確にあると思うのです。そこらのところで、どうしてもナショナリズム

になる。本人が明治のときにナショナリズムという言葉はもちろん使っていないと思いますよ。それは場合によっては「御国のため」とかいうふうな言葉であらわしていたかも知れんけれど。

樋口 その場合に問題なのは、兆民の言葉でいうならば、「道徳という霊気、学問という滋養液で養ってやる」という、その養っていくという努力が日本では大正、昭和と、とにかくかなりの程度、人民が道徳と学問でもって育てていくとする動きがあった。もちろんそれと反対の動きもあって、戦争につながったことも忘れてはいけないうのですけれども、現在の第三世界、東南アジアとかで、そのような動きがどういうふうになるかというのが、一番これからの問題だと思いますけれどね。

桑原 それはさつき、上から、下からというようにことを言った、そういう割り切り方でやっていける。単純化して言えば、中国も日本も、それから韓国も、それからどこでもいいんですけれど、たとえばフィリピンもそれぞれ国である。国であるかぎり、みな同じである。それはそうあったほうがいいんですよ。しかし、その国のあ

り方が、その前の歴史というものがあってね。歴史というものは不公平なものですからね。

樋口 本場にそうですね。割り切れませんな。

桑原 ですから、いままでどの国が怠けていたとか、それ見ろというようなことはけっして言うつもりはないけれども、にもかかわらず、これも明治における日本の近代化の問題を考えていけば、その前の江戸時代、徳川時代というものの——太閤から考えるとそこまで考えなくても、江戸時代の意味というものがあつたわけですね。

樋口 ありがたさみたいなのはありますね。

桑原 そのかわり、ある意味でまとまりがあつたということは、悪い面では長いものに巻かれるようなところもありますからね。

だけど生産関係とか、そういうこととももちろん結びつくけれども、広い意味でのカルチュア、文化ですね、それがどうなったか。たとえば、こういう議論をやりだすと大変難しいことで、差別的言語を使つてはいけなけれども、フィリピンならフィリピンという国は、国になりました。けれどもそれは、スペイン人が来てもまだ

国になってません。植民地であつた。それからこんどはアメリカに取られた。

フィリピンの学者とそういう討論会をやったときに、フィリピン全部ではありません、一部のグループですが、国の文化のアイデンティティの議論が出たときに——僕は日本でそんな議論はあまり必要ない、アイデンティティというような、なんでそんな英語でつまらんことを言わんならん、ちゃんとありすぎるぐらいあるというんです、この国は。けれどもフィリピンはスペインを介して西洋のキリスト教なんかが入るまで——ナショナルと言いましたかね、そういうものはなかったんだと。こっちは遠慮してたんですけど、かなりそういう率直なことを言う人がありましたね。あとで、フィリピンのことをやっている人に聞いたら、そういう学派ではないけど、考え方のグループは相当あるそうです。そうすると、そういう国で伝統を守れとかいうことが、変わってくるわけですよ。

樋口 そうですよ。インドがまた大変でしょう。スリランカも、とにかくそういうアイデンティティのことを言

いだしたら、日本は本当に……。

桑原 日本でアイデンティティというような言葉を使っているのは勝手だけれども、生産的でない、不必要だ。外国から見たら、日本はいい国だけれどもアイデンティティがありすぎると見えているというのが僕の考えです。

樋口 先ほども言いましたけれども、現実的には恩賜の民権を育成していけば回復の民権になるんだと思うし、日本はさっき言った道徳という霊気、学問という滋養液でもって、ちゃんと養い育ててきたんだけれども、それができたのはアイデンティティが日本はありすぎたというか、あったからできたので……。

桑原 あったからできたか、できたからあったか……。樋口 ところが現在の東南アジアなどの諸国では、いまの道徳・学問でやっていこうと思っても非常に困難な状況にある。

桑原 だから僕はその説明で、兆民の考えは基本的に好きですけれども、いまあなたが引用されたその部分は、それは日本について言っているのであって、これを「中外に施して悖らず」というふうにはいかならないと思います

ね。

樋口 そのへん日本はほんとに幸運だった。

第三世界における伝統と近代化

桑原 中国の場合でも、今ある意味で同じようなところになっていると思うけれども、そのときにそれをまとめていくものが何であるか。そこでマルクス主義、レーニン主義というのではないだろうかと思われる節がある。

樋口 毛沢東思想もどうでしょうか。

桑原 そこで中国の古典思想ですが、やはり儒教というところへいく。それに宗教的にいえば道教、そして思想は老荘思想がありますけれど、老荘思想というのは面白い思想ですけれども、これは要するにアナーキズムですからね。

樋口 たしかに体系的に非常に面白いですけどね。

桑原 面白いですよ。面白いけれども、あの老荘思想は、禅もそれと同じになるのですけれども、禅宗の坊さんは、もちろん偉い人はたくさんいる。しかし冷静に見

ると、なかには、世故に極めてたけている人がいるということは、私は常々観察しています。もちろん、こういう話は全部例外があるのですけれどね。ですから、それでは片づかない。

樋口 それからこれは単なる思いつきだけを申ししますと、最近は何のNICSですね、これを儒教圏でくくって、儒教が発展にプラスじゃないかと言う人が出てきているけれど、僕はこれはもう一つ、儒教だけじゃなくて仏教をもう少し考えたかどうか。ことに東南アジアのタイとか、それからスリランカでもそうで、宗教的な対立で苦しんでいますけれども、インドは祖国であるにもかかわらず、それほど仏教が強くない。まあその辺の分布は別にしまして、それから大乘仏教、小乗仏教といういろいろ問題はありますけれども、儒教を考えると同時に仏教ももう一遍考え直す必要があるんじゃないか。これはこの東洋哲学研究所のことを考えて、言うのじゃありませんけれども、僕はもう一遍考える必要もあるんじゃないかと思うのです。

桑原 考えるというのは仏教の社会革命——仏教は革命

的な場合は、中国にも清末に死刑になったような人もあるからね。日本では仏教者で社会あるいは政治の問題で命を捨てた人は、あまりないと思います。

樋口 しかし鎌倉仏教では、死んではいけないけれども相当弾圧された。

桑原 それはあります。現実的に考えますと今の日本では、もちろんすべて例外はありますよ、まったく例外で偉い人がいるかもわからん。しかし、それが社会を改良していくとか、そういうことには社会のあり方がちがいますから、戦国までの鎌倉仏教の中の浄土系統ですね。これがあるでしょう。しかしこれは……。

樋口 本願寺になってから（笑い）……。

桑原 それは仏教社会史というふうな観点で考えないといかんけれども、徳川政府というものがものすごくうまく抑えこんだ。

樋口 しかしそれでも隠れ念仏があり、日蓮宗の不受不施派もあった。それから儒教との比較でいいますと、たとえば島田先生のお詳しい陽明学派の李卓吾とか、そのあたりがありますけれども、仏教でもやはり一向一揆と

か、その他、一応、反権力的な宗派もありますし……。

桑原 もうしかし、今はそれはありえない状況にある。

樋口 現在ではそうですね。

桑原 だから日本が第三世界のモデルになるか。僕は参考にはなるとは思いますけれど、モデルにはならない。それはライシャワーさんと僕は話し合ったことがあります。

たとえば、タイとおっしゃったけれども、いまタイで大汚職が見つかって、昨日か、一昨日かの新聞に名前が出ていたけど、最高の坊さんが勲章を……。日本で売敷というのですか、そういうことは昭和になってもありませんでしたね。そういう弱り目をつくわけじゃないけれども、あれはやはりタイとかビルマにおける仏教というものが、やはり生産ということとは矛盾する。ヨーロッパの中世に寺院がいっぱいあったでしょう。そのときに悪口を言う人が宗教が墮落していたからだ。中世で修道院とかそういうものが勤労、生産の中心にありますけれども、にもかかわらず、それをつぶしたということで近代化が進むわけですからね。

それと同じようなことを日本でいいますと梅棹忠夫さんやら岩田慶治さんが言っていて、これも単純化がすぎると誤解を生じますけれども、日本の工業化が、機械にたとえば鏡もちを供えとか、自転車にしめ飾りをつけるとかいうふうな……。

桑原 ロボットにつけるとか。

樋口 つまり簡単にいえば機械とか、そういう物を拝むような、ヒト化する考え方というのが、工業化にプラスに働いたという考えがあります。私はそれをもう一歩進めて、現在で一番大きい環境破壊の問題、あるいは公害問題において、仏教における「山川草木悉有仏性」、「山川草木悉皆成仏」という考え方で物すべてを大切にすると、みな仏性をもっている、魂をもっていると考えるという仏教的な考え方を、これは現実には日本の仏教界にどれほどの力があるかは別として、一遍仏教の原点にかえってそういう点を生かすならば、環境問題、公害問題なんかの解決に少しはプラスになるんじゃないかという気はします。

桑原 それは僕は、やや樋口さんにおける楽観主義じゃ

僕は宗教を無視できないということは樋口さんに賛成ですけれども、これで近代化が進むということについては、近代化がいいか悪いかということについては、今日はちょっと外したいんです。大変難しいのじゃないか。僕はインドは深くは入ってませんけれども、それはわれわれがふつう考えるような社会の改革、あるいは改良ということとはちがうと思う。ここで大変すばらしい仏教なら仏教を体得した人が世直しを考えると、日本のことが、理論的にはあり得ると思いますけれども、日本のこういうふうな豊かになったところでは……。

樋口 先生のおっしゃるとおりだと思うんです。けれども、非常に単純化するので誤解を生ずると思いますけれども、フランスの政治思想家のジュヴネルがこういうことを言っている。近代ヨーロッパの工業発展の場合、デカルトが自然というものをモノ化して考えたのが工業の精神の基礎になった。それに対して、アジアはちがって、道教では「万物」という思想があつて、逆に物をヒト化というか、物も心をもっている、魂をもっているというのがちがうんだということを言っている。

ないかという感じがします。仏教というところへそれをもっていくのはどうか。

さつき、仏教で死んだ人があるかというような話をしましたね。僕はお断りするまでもなく、宗教的な学問あるいはその実践ということが乏しいから、本当は発言停止したほうがいいのですけれども、山川草木というふうなこと——つまりデカルトが自然をモノ化した、それはそのとおりだと思うのです。僕は自分のことを言うとして、合理主義というのは好きですから。だけどデカルトは、あの人はお宗旨にはなるべくさわらんようにしていたわけですが、でも、デカルトでいくと物になる。

デカルトは、歴史というものも、お話だといってばかりにしておったんですけれど、僕はできるだけそうしたいと思うのですけれども、どうも近代化というようなことをいま議論していると、ある国では近代化が大変うまくいくのに、他の国ではもたつく。努力の不足ということも、もちろんあるでしょう。けれどもそれよりか、それまでの歴史、広い意味でです、それを無視できない。そうするとデカルトと歴史とどう結びつくかということこ

ろが一番の問題だと私は思っているわけで、単純にデカルトをあほみたいなことを言うのは、それは反対ですけども、そこでデカルトを離れてパスカルというのが出てくる。パスカルは物質の問題、つまり科学の問題は新しいほいほいので、それをどんととやる。しかし心の問題、神様の問題は、大昔からだれが決めたのか知りませんけれども、決まっています。それはそれを守るんだと、そういうことへ行きましたね。今もやはり、そういうことになっていると思うのですけれどね。

そこらの問題を考えるということは、もちろんあると思いますが、アニミズムとかわれわれ東洋のほうの思想あるいは宗教を低級だと思ふ必要は毛頭ないと思うのです。じつは日本の文化・意識には三つの層がある、というのがずいぶん以前からの僕の持論なんです。第一が「西欧的・近代的な層」、第二が「封建的・サムライ的・儒教的」な「強いていえば中国的な層」であって、そのまた底に、第三の「ドロドロとよんだ、規定しがたい、古代から神社崇拜といった形でつたわるような、シャーマニズム的なものを含む、土着宗教的な層」がある。柳

いうことですね。残っているのがいいというのじゃありませんよ、現象として残っているか。

これは中国についても同じことが言える。中国の方と、僕はそうたくさん付き合いはないけれども、中国の学者が去年、二、三人うちへ見えて、いろんな話をした。何でもお答えになるけれども、二十一世紀になって世界の人口の四分の一を中国が占める、その時に世界の文化がどうなるとお考えですかと聞いてみた。つまり中国文化、もっとわかりやすく言えばあのすばらしい書道の芸術、中国の絵画、山水画というのが昔からある。それからいろんなことが、いちいち言わなくてもあるんだけれども、そういう伝統文化に対する政策がはつきりしない。

ですからそれが僕は気分として——気分というのは歴史の中へも入ってきているわけですが、それが力になるためには、けっして記号化されたものだけで片づくものではない。僕は、このごろ一番切実に感じているのはそういうことですね。数学なら数学の公式があるでしょう。それは知っている。教科書で知ったらおしまいだけれども、それを適用できるかできないかということとは、それ

田民俗学がこれに「クワ入れ」したんですが、私が人文科学研究所でやった「文学理論」についての共同研究でも、なくなった橋本峰雄君が中里介山の『大菩薩峠』の研究にも利用してくれました。

しかし問題は、日本は大変古いものを残しながら、僕らはこのごろ表面を見て気になりすぎているのかもわからんけれども、あらゆることを英語で言う。日本語がちゃんとあるのに。それは、われわれが明治からきた西洋への傾斜というものが、富をもつことによって大分変化している。そしてその中に、アニミズム的なものがムードとして残っていますけれども、それをなにか自然環境の問題に、その残っているアニミズム的な雰囲気、心理的雰囲気、これを活用すると考えられますけれども、基本的なところは私の考えの不足もあって、まだうまくいくとは言えない。ただし、そういうことを、これから若い人が本気で考えてみるということは必要だと思いますね。

樋口 それはおっしゃるとおりだと思います。

桑原 昔からのものが、日本にどれだけ残っているかと

までの古人の誠実に生きた、愛情とか感情を含めた、感性を含めたものとしての裏打ちがなければ現実化しないと、まあわかりきったことですけれど、それを考えておるのですけれども、そういう点で問題はあと思っています。

しかし、問題をなにも排他的に日本流に考えるとか、中国ふうを考える、ビルマふうを考えるということではないけれども、考えなければいかんと思いますけれどね。それからもう一つ、ナシヨナリズムということですが、

これもだんだんデカルトから外れているみたいなことを言いますけれど、国を愛せよと、これは子供のときから教えんならんけれど、教えていて、知的に愛国心を知っている、これはパワーにはならないと思います。本当に日本が好きだとか、中国が好きだとか、そういうものがなければ、力になってこないと思いますね。

そうすると、やはり近代化というようなことを考える場合にでも、人々が自分たちの社会——国といってもいいのですけれども、これに結集する。もちろん個人の利害ということとは考えていくと思うし、それが結集されていくことが近代化にも要件になるんじゃないかと思う。

ちよつと精密には言えないと思いますけれど、たとえば韓国の今度の選挙でもわかるように、全羅南道は九〇%金大中だったということ、これはナショナリズムとしてはたいへん低い段階です。日本でも藩があつて、戊辰戦争の時に東北が結束して朝廷に抵抗したときがありますけど、越後の長岡藩が朝廷に抵抗する、というようなその段階を韓国はいま通っているといえないこともない。

樋口 同じようなことが、アフリカだったら部族問題がありますね。それにインドなんというのは大変ですね。桑原 そこが大変難しい問題でね。われわれ日本はお金でできたし、近代化を応援してくれといわれる、また応援したらいと思うのですけれども、その場合に、ごく簡単なことを言えば送った食糧でも、取り込んで回さない政治権力があるんです。そうするとやはり、ものすごく具合悪いんだ。

それから遅れた——遅れたというのは差別して言っているのではないけれども、その地域が知的に情緒的に何らかのまとまりがないと仕事が大変で、そして、その部族と部族の反感とかいうものは、ものすごいものですか

らね。ですからそういうことを考えると、はなはだ弱気にならざるをえない。

樋口 先生のおっしゃるとおり、ベシミスティックにならざるをえないですね。

桑原 それが強制でなくして、小さい国でもそれがまとまるように、だから、こちらからそれを干渉にいくことじゃないけれども、まとまっていけないのが自由であるというふうなことではないんだと思う。それはものすごく難しい問題ですけど。そして少し発展段階の高い種族が応援しなければ、独立したある小さい国が動かないということがあるわけですね。そういう問題をどう考えるかということになってくると……。

樋口 先生、人権の問題ですけどね。人権を守る組織といつてもいいし、地域といつてもいいし、ある一つのまとまりですね。これにはオプティマムといいますが最適の広さがあつて、ある程度以上広くないと外に対して守れない。いまの全羅南道みたいな所ではだめですし、ところが大きくなりすぎると、こんどは中で抑圧があるとか……。

桑原 だからケース・バイ・ケースという、たいへん水くさい言い方になるんですけど、しかしその際、中国というものが古代から——もちろん多少大きくなったたり小さくなったりしているけど、いわゆる普通の意味での中国本土は漢のときからずっときているわけです。

樋口 これはまさに、日本のアイデンティティじゃないですけども、あれは漢字があつたからでしょうね。非常に単純化すぎるかもしれないけれども。

桑原 そこらの問題がたいへん難しいね。

樋口 いくら方言があつても、字が同じだということではないですね。

桑原 ですから、きょうは概論みたいな話ばかりしていたけれども、たとえば仮にブータンならブータンという国を、失礼ですけど、どうしたらいいかということになったら、その実状を知らなければならぬ。それはそれぞれ歴史をもっていて、日本のように島国じゃありませんから、つねに侵略・被侵略みたいなことがありうるわけですね、アフリカみたいなところでも。ですから、そこらの問題を考えると……。

しかしある意味で、テレビでアフリカとかそういうところを、このごろ見ているわけです。それで一種の——

一種ですよ、まだ——結びつきのようなもの、あるいはもっと確実なことを言えば世界に対する認識ですね。それから愛情の必要とか、そういうことは多少できてきたのではないか。ベシミスティックなことばかり言つてしまいましたけれども……。

樋口 やはり一種のアイデンティティがそこで起きてくる可能性はありますね。

桑原 可能性があるのではないかということですね。

(くわばら たけお・京都大学名誉教授)

(ひぐち きんいち・京都大学名誉教授)

〔追記〕桑原武夫先生は、四月十日、御逝去になりました。この対談は、先生の最後の御発言といえるものです。

対談の速記が起こされた段階で、桑原先生から任された整理をすませ、先生にお渡ししたちようどその頃から、先生のお体の具合が悪くなり、結局、読者の皆さまに読んでいただくこの対談の構成は、桑原先生よりも、もっぱら私の責任によるものとなったことを付記いたします。

(樋口 謹一)